

火花

第 58 号

1986, 6

火花

第58号 1986, 6

共産主義者同盟（火花）

- ◎ サミット「国際テロに関する声明」の背後に
◎ サミット「国際テロに関する声明」の背後に
あるものとプロレタリアートに問われていること P 1
- ◎ 反天皇闘争におけるプロレタリアートの任務 P 7
- ◎ 共産同（火花）への圧倒的カンパを！ P 11
- ◎ 最近の政治警察 P 13
- ◎ 共産主義者同盟（火花）発行パンフ紹介 P 18

サミット「国際テロに関する声明」の背後に

あるものとプロレタリアートに問われていること

はじめに

五月四日から六日、首都敵戒体制の下、東京サミットが開催された。そこで再び明らかにされたのは貿易、通貨、債務問題など世界資本主義の経済的諸矛盾を、ブルジョアジーがなんら根本的に解決する能力をもたないということである。だが、今回のサミットを評価するにあたって、われわれが特に注意しなければならないことが今一つある。それは、サミットという政治的イベント全体をつうじて、ブルジョアジーが「国際テロリズム」との闘争を正面に掲げつ

づけたことである。「われわれは、テロリズムと闘い続けることは国際社会が一体となって遂行すべき任務であることを認識し、この害悪と闘うために最大限の努力を払うことを誓約する」(『国際テロに関する声明』)。これは先のこととの関係では、世界資本主義の経済的諸矛盾を解決しえないこと、およびそれに関連する列強間の利害対立の深化を隠蔽し、帝国主義者の権力を万能とみせつけるためである。と同時に看過してならないのは、「国際テロに関する声明」以下「声明」とする一の背後にあるブルジョアジーの反革命軍事活動の独自の発展である。そこで、われわれは、この背後に

あるものをそれ自体において分析することにする。

I

サミットで列強首脳によって採択された「声明」は、「国際テロリズムをなにごとに正確に規定していない。あえて、さがし出すとすれば、それはせいぜい、「自由と民主主義」「文明」に対するアンチの概念である。だが、「自由」「民主主義」「文明」といった概念がまた曖昧なものである。

こうした抽象性、曖昧性こそ、ブルジョア民主主義の特徴である。したがって、われわれは、問題を階級的に見てみる必要がある。そうするとブルジョアジーの言っていることは、次のことであることがわかる。

すなわち、「自由と民主主義」とは、資本家が労働者の経済的隷属を永続化する「自由と民主主義」であり、帝国主義が後進諸国の民族自決権をふみにじり、勤労大衆を収奪する「自由と民主主義」である。そして、「文明」とはブルジョア的な社会秩序のことである。とすれば、「国際テロリズム」とは、資本主義と帝国主義の権益、利益への挑戦のことであり、ブルジョア社会秩序に対する反乱のすべてをさすものである。

東京サミットが、「国際テロリズム」を特別に問題にしなければならなかったのは、資本主義と帝国主義の権益、利益への挑戦と、ブルジョア社会秩序への反乱が国際的規模で増大しているからである。まず、このことを確認しておこう。

II

さて、サミットでの「テロリズム」に対する闘争宣言は、なにも今回だけのことではない。それは、七八年ボンサミットにおける「ハイジャックに関する声明」以降、毎年なんらかの形でおこなわれてきた。当初その念頭におかれていたのは、ハイジャック、暗殺、破壊活動といった個々の具体的な活動である。だが、最近、その対象が一気に拡大された。拡大のイニシヤチブをとったのは米帝である。

昨年六月二一日、レーガンはダラスで演説し、TWA機事件と同時に、エルサルバドルの革命運動、フランクフルト空港爆弾事件などを「西側文明」を攻撃する「非文明野蛮人」の行為として批難した。ついで、七月八日の全米弁護士協会年次総会での演説では、イラン・キューバ・リビア・ニカラグア・北朝鮮の五カ国が「テロリスト国家連合」を築いているとして、また、ソ連がこれら「テロ国家」のほとんど全部と親密な関係にあるとして、「テロリスト」に聖域を与えないために共同で対処しなければならないと強調した。そして、今年一月一四日、ワシントンでの首脳会議では、LIW(低強度戦争)を「戦略」化することを決定した。その際、ワインバーガーは、「とくに欺瞞的な仮面は『民族解放闘争』であり、これらの共通の特徴は、地球上の自由と自決をむしばんでいる」と述べ、LIWが主に民族解放闘争をさしていることを明らかにしている。さらに、二月の議会でレーガン報告(「地域紛争に関する報告」)は、現在LIWがニカラグア、レバノン、南アなど世界四〇カ国で展開されているとし、帝国主義の側から「ソ連衛星国」に同様のLIW

をしかけるべきだと主張している。

このように、米帝は「国際テロリズム」を、いわゆる「都市国家」でのゲリラ活動をさすものから、資本主義・帝国主義に反対するすべての運動へ拡大すると同時に、なかならず勝利した革命や現在闘われている民族解放闘争を中心にえがき出したのである。そして、ニカラグア、キューバ、イラン、リビア、北朝鮮などが「テロリスト」を支援し「聖域」を与えているとし、国際革命運動との結びつきを破壊する必要性を強調している。「L I W 戦略」とは、この破壊のための軍事行動のことである。

東京サミットが、従来のサミットより一歩進めたのは、「国際テロリズム」という曖昧な概念のもとで、かかる「L I W 戦略」を帝国主義列強国全体で承認したことにある。「声明」は、「制裁」行動を「国際法の枠内において、かつ自国の管轄権の範囲内」というが、「L I W 戦略」の承認という本質を少しもかえるものではない。

III

つぎにサミットで承認された「L I W 戦略」であるが、それが具体的にどのようなものであるかは、四月のリビアへの爆撃が如実に示している。これこそは、昨年夏からボイデクスター大統領補佐官を中心に周到にねりあげられてきたものであり、「L I W 戦略」の発動である。この計画にもとづいて、三月二四日～二五日、リビアが領域と主張するジドラ湾海域で戦争挑発をくり返し、同時にリビアのシリテ基地と哨戒艦にミサイル攻撃を行っている。その上で、

四月一五日未明、地中海の空母とイギリスの米軍基地から多数の爆撃機を出動させ、トリポリ、ベンガジを爆撃したのである。

米帝はリビア爆撃を「国際法」に基づくものであり、「自衛権」の行使であると主張している。このことは、現在の「国際法」が帝国主義の一方的爆撃を可能とさせるものであり、彼らのいう「自衛権」とは、自国に対して直接軍事行動を行う能力を持っていない小国に対しての大国の側から軍事行動をさしているのである。「声明」のいう「国際法の枠内かつ自国管轄権の範囲内」とは、米帝の論理と同一なのである。

ここで注意しなければならないのは、かかる軍事行動を準備していく過程で、ニカラグアなどへのリビアの支援をあげていることである。米帝はグレナダ軍事侵略につづいて、ニカラグアへの干渉を強めている。彼らは現在、コントラ（反革命ゲリラ）を二万五千人に増員し、米軍事顧問団五〇人これを訓練し、サンディニスタ政権を二～三年内に打倒することを計画している。また、それが失敗した場合にそなえて、米帝の直接介入も準備しているという。

レーガンは、L I W が世界の四〇カ所を進められているというが、米帝こそは、すでに四〇カ国以上に反革命のために軍隊を派遣しているのである。八四年には、仏帝、伊帝などとともに、レバノンに進駐している。

今回のリビア爆撃は、こうした全世界的な反革命軍事行動の一端に他ならない。レーガンは、リビア爆撃直後、必要なら同じことを「テロリスト」を支援する他の国にも行うと宣言した。

帝国主義列強諸国は、東京サミットにおいて、リビア爆撃を支持し、レーガンの宣言を承認した。「声明」の際のリビアを名指しす

るかどうかの若干の意見対立は、列強各国の中東における自国権益からする経済上、外交上の対立の反映にすぎず、L I W、すなわち反革命軍事行動を組織する必要性ではなにも対立もなかったのである。

IV

「声明」がテロ防止の具体的措置としてあげているのは①テロを主唱、支持する国家に対する武器輸出の禁止 ②テロ活動している国の大使館、領事館の規模制限、必要に応じて外交官の大幅削減、大使館の閉鎖 ③テロ関与で国外追放された者の入国拒否 ④犯罪人引き渡し手続きの改善 ⑤入国及び査証発行の厳格化、などである。

このうち、①②についてはすでに、リビアを対象として西欧を中心に具体化されている。また③④⑤については、ICPO体制の強化および出入国管理体制の強化ということである。

ここで問題になってくるのは、「声明」が「L I W 戦略」の承認である以上、かかる①⑤の背後で進められている帝国主義の側からのL I W の実行体制である。これは、先にみた米軍においてだけでなく、他の帝国主義国のほとんどにおいても、一般的な帝国主義軍隊と区別される特殊部隊の建設として進められている。

すなわち、七二年ミュンヘン事件後に作られた西独G S G 9 のような特殊戦闘団である。その特徴は、英S A S、イスラエルモサドのように諜報機関から生れたものであれ、西独G S G 9 のように軍隊の中から生れたものであれ、日本のコンバットチームのように警

察機構の中から生れたものであれ、共通して精鋭を集めた軍事活動の単位として確立されていることである。それは、七六年エンテベ事件（モサドによる奇襲）七七年のモガジソ事件（G S G 9 による奇襲）などが典型的なように対ゲリラ用の戦闘団である。

「声明」がテロ防止の具体的手段として、表明した外交上の措置は、このように、正規軍としての帝国主義軍隊、警察機構と同時に（もちろんその一部ということではあるが）対ゲリラ用の特殊部隊の建設を背景としていることだ。したがって、図式的にいえば、プロレタリアート人民の武装闘争へ発展した場合、正規軍としての帝国主義軍隊と遭遇する以前に、特殊戦闘団に直面することになる。「声明」は、階級闘争がこうした局面に入っている中でのものである。

V

ではプロレタリアートは、いわゆる「国際テロリズム」の現実にとどのような態度をとるべきであろうか。

すでに述べたように「国際テロリズム」の概念は、きわめて広い概念である。広いというのは、資本主義・帝国主義に反対して武装闘争を行っているのが、共産主義者だけでなく、さまざまな民族主義者、いくつかの宗教勢力によって構成されているからである。

したがって、そこには党派闘争が存在する。例えば、イラン革命では、共産主義者とイスラム派の反バレービ共同闘争が、勝利の瞬間から暴力的党派闘争に発展している。ニカラグアでも、F S L N 内のプロ独派が革命を防衛するために自由主義ブルジョアジーとも

闘争しなければならなくなっている。パレスチナ解放運動では、権力奪取以前から暴力的党派闘争が存在する。

こうした「国際テロリズム」の現実を考える場合、プロレタリアートは少なくともニカラグア革命への支援と、イラン革命への支援を同一にあつかうことはできないであろう。われわれプロレタリアートは、なによりも労働者階級の経済的解放をめざす組織と運動を別個にとり出し、防衛し、発展させることである。これが第一である。

第二に、抑圧民族のプロレタリアートは、それがたとえ偏狭な民族主義に毒されていたとしても、被抑圧民族の側の分離、独立運動を承認することが要求される。その中には、インドシナ教徒のカシミール独立運動も含まれる。それは、民族主義と闘争するためであり、彼らの間で共産主義を宣伝し、共産主義者間の民族をこえた団結を作り出すための条件としてである。その際、被抑圧民族の側の共産主義者は、民族主義との闘争を第一位に押し出すことが特に重要である。

以上の二点は、七〇年代初頭からの「国際ゲリラ」派の思想的弱点の総括からもててくることである。次に、このことについて見ていくことにする。

VI

今日の国際ゲリラ派は、ベトナム革命戦争を先頭とした国際階級闘争の高揚の中で、いったんの敗北を喫した部分の中から、七〇年代初頭に生れたものである（それは、六九年のPFLPによるハイジャック闘争や、七二年テルアビブ闘争、ミュンヘン事件を契機と

して進んだ）。

したがって、国際ゲリラ派の登場は、ベトナム労働党（現共産党）中国プロ文革派などの相互関係にあった。だが、この相互関係の対象化と、真に革命的な綱領・戦術・組織に基づく新しい団結へと進む前に、パレスチナ解放闘争を媒介としてゲリラ間の交流・相互支援体制の確立へと発展し、一定の独立性をもって国際ゲリラ派を定着させた。同時に、国際ゲリラ派の隊列では、思想的には無政府主義的傾向が強いといわれる西独赤軍派、直接行動（仏）、赤い旅団などが影響力を拡大した。そして、民族国家の枠をこえた相互支援体制による武装闘争の再生産構造の確立は、一九七五年のアルメニア解放秘密軍（ASALA）の結成をはじめ、分離・独立派の組織も少なくなく結びつけていった。こうした構造は、現在もつづいている。

しかし、八〇年代に入って国際階級闘争の構造に若干、変化が生れてきている。それは、ニカラグアPFLN、フィリピンCPPなどに見られるような共産主義者の強固な、かつ広範な大衆と結びついた組織があらためて国際帝国主義との闘いの先頭に登場しはじめている。このことは、六〇年代末から七〇年代初頭に問われたベトナム労働党、中国プロ文革との関係をめぐると同様のことが、PFLNやCPPなど（もちろんキューバ共産党、ベトナム共産党等）との関係をめぐって、国際ゲリラ派の共産主義者にも再び問われずにはおかない。そして、ここで問題になるのは、共産主義者の運動と組織を別個にとり出し、その国際的団結を作りあげることである。民族主義者の運動への支持は、このことに従属させねばならない。

歴史は、明らかに、再び同じ課題をつきつけているのである。もとより、それは国際ゲリラ派の共産主義者に対してだけではなく、プロレタリアート全体に対してである。

VII

すでに明らかにしてきたとおり、「声明」は、プロレタリアート人民の闘い総体に向けられているだけでなく、軍事的な幾重もの準備を背景としている。したがって、それに対するプロレタリアートの側の準備が問われている。

歴史的経験が示すところによれば、ブルジョアジーの正規軍は、その出身階級（下級兵士のほとんどが労働者、農民の子弟である）

からいって、軍事的な対決を基本に、軍隊を大衆的にとらえるほどに運動が発展する中で、解体の可能性をもっている。だが、現在の対ゲリラ用として生れている特殊戦闘団は、治安警察軍と同様に、その性格からして相互殲滅の関係以外ありえないといえる。

ここからして、プロレタリアートには、相互殲滅を射程に入れた戦闘団の建設を中心にして、幾重もの武装を促進していくことが問われている。ブルジョアジーの幾重もの武装に対して、プロレタリアートの側のかかる武装をあらゆる方面からただちに開始すること。これこそ「声明」に対する回答でなければならぬ。

反天皇闘争におけるプロレタリアートの任務

次の文書は「天皇在位六〇年式典反対」靖国神社公式参拝反対、四・二九京都集会」の参加者に対し、春期政治行動実行委（プロレタリア行動委呼びかけ）の名で配布されたものである。現在の反天皇運動において、少なくとも一部分が、ブルジョアジーの一部のいわゆる「天皇万能論」の「土俵」のつかった上で、天皇イデオロギー（皇国史観）との闘争や「内なる天皇制」を特別の理論にまとめられていることを考慮すれば、あくまでもプロレタリア革命における任務という点から天皇問題をとらえる原則は、広範に宣伝する必要がある。すべての読者がすでに『火花』誌上で公表している天皇闘連の論文とともに、本文書の宣伝を拡大するためにも検討するよう要請する。

なお、ここで呼びかけている「東京サミット粉砕闘争」とは、全国労働者政治委員会とプロレタリア行動委員会（準）の呼びかけによる「五・四プロレタリアートの国際共同行動を、東京サミット粉砕中央行動」（恵比寿公園）のことである。

本日の政府主催の在位六〇年式典を、徹底糾弾するとともに、ブルジョア政府の打倒と天皇制の廃絶を全労働者大衆の共同の事業として達成するために、われわれ春期政治行動実行委員会は、以下のことを呼びかける。

記念式典のねらいはどこにあるのか

本日の在位六〇年式典を前にして、政府や、「文芸春秋」「諸君

などの右派ジャーナリズムは、一斉に「開戦を決定したのは天皇ではない」「御前会議のご英断があったからこそ、戦争は、終結した」などと「平和主義者天皇」のキャンペーンをはじめた。いうまでもなく、A級戦犯ヒロヒトの罪状をみそぎ「全国的に天皇の在位六〇年を祝賀しよう」という狙いである。

いうまでもなく、天皇は、大東亜戦争の責任者である。繊維産業を中心に、発達してきた日本の資本主義が、国内市場にゆきづまり、大不況を前にして大陸に突入していった戦争は、明らかに、資本家諸君とそれを背景にした天皇軍部に、その責任がある。

しかし、われわれは、在位六〇年はもちろん、天皇の存在そのものに反対する。それは、彼らに、かかる「過去」の罪状があるばかりではない。われわれは、資本家諸君と、天皇の「現在」をこそ批判する。

現在、日本帝国主義は、新たな飛躍点に立っている。すでに、最近のいわゆる「マルクス疑惑」で明らかにされたように、日本の独占企業は、政府の全面的後押しをうけて、現地の独裁政権と結びつく、あるいは、借款や直接投資をつうじて、現地資本を従属させるなどして、東南アジア、韓国、アフリカ諸国などを食いものにしていく。また、欧米諸国との間の「貿易摩擦」という名の帝国主義内のあるいは、新たな段階を迎えている。国内においても「蓄積せよ、蓄積せよ」のかけ声のもとで馬車ウマのように、労働者を動かしてきた今、教育問題、家庭内暴力、労働忌避などの形で「規律の乱れ」が現出している。このように累々たるシカバネの上についた莫大な権益と顕在、潜在するを問わず、噴出する告発という爆弾をかかえて、全身から血を流したたせながらも、奔走するのが、今

日の日帝の姿である。

かかるブルジョア諸君の「難局」に際して、政権に巣くう自民党の政治家諸君は、燃糸工連事件にみられるごとく、いりまでもなく稲村などは、トカゲのシッポだが、あまりにもうす汚れすぎている。中曽根も、その点では、人後におちない。だからこそ、そういった「世俗」のどろくささブルジョア政治の腐敗から、一見、超越したかのような「聖者」・ヒロヒトなど皇族のおでましとなるわけである。

いうまでもなく、天皇家自身で、多数の資産家や、ブルジョア政治家を排出する「正田、堀田、森」家などとの血縁・姻戚関係をもっており、ブルジョア諸君の上流趣味の紋章になっている。

ただし、さらにわれわれは、政治の表舞台に立つのが、皇室一族であろうがなからうが、ブルジョア政治の裏方・黒子をも暴きつくし、舞台そのものを転覆しなければならぬ。このことを、まず確認しておく。

式典・サミットをつうじた治安弾圧に反対しよう

六〇年式典・サミットを通じて、七〇億、三万人の警備隊が導入される。「これで夜間外出禁止令ならば戒厳令」という状態が、現在、生み出されている。「防衛」場所は、御所、東宮、靖国にとどまらず、京都御所、柱離宮など、広範な領域に、またがっている。この警備は、「飛び道具」にのみむけられているのだからか。否である。要するに、ブルジョア諸君にとっては、自分達以外は、潜在的な敵なのだ。

それは、日の丸、君が代などを通じて、学校現場、地域に強力な指令をもって青少年を組織しようとしていることでも明らかである。ブルジョアジーは、国家的イベントや儀式を行うことで、強制力をもった動員体制を地域名士などを活用してつくることで「危機」に対処しようとしているのである。戒厳体制はそのための「演習」でもあるのだ。

われわれは、労働者大衆の政治的自由を守るために、あらゆる警察の横暴、弾圧に反対し、民主主義的権利の堅持を呼びかける。ただし、現在の弾圧は例えば「免許証の住所が記載事実と違う」「ピラでロケット砲に言及した」などという理由で法律をはるかに越えた地点で行われているのだからわれわれは、あくまでこの現実を直視し、自らの組織的行動と武装をも準備していかねばならない。

民族排外主義反対！ 国際的統一と

共同行動を発展させよう！

さらにブルジョアジー諸君は、難局の現在、日本経済の労資協調への優越性、それを支える日本民族の共同性、文化の優越性を居高に説いている。

「それは、日本民族が時代はどうあれ、天皇を中心悠々の歴史を積み重ねて来た結果である」という妄言まで口をついて突び出している。

日本経済の優越性とは何か？ それは労働者を民族共同体の名のもとに資本家に、はむかわないようこき使ってきたことや、前述したように国家を背景とした大資本によって小国を従属、収奪して

きた結果ではなぬのか。

だから、われわれは、労働者の経済的解放は、一国においての闘いのみでは決して勝利しえないし、さらにフィリピンや韓国での大衆の民主主義と民族独立を求める闘いを支持し、これと結びつくことを自らの解放のための義務だと考える。利害を同じくするのは民族ではなく、全世界の労働者大衆である。

今日の帝国主義のもとでは、諸民族は国家に分断され民族経済を組織し、互いに民族の優越性を誇示することで排外主義を競い合い、大民族による弱少民族の支配を生み出している。

われわれは、天皇などのあらゆる民族排外主義イデオロギーに反対する。そして、それとともに今日の労働者の分断と抑圧を生み出す物質的根拠が民族であることを明らかにし、その障壁を越え、国際的な共同行動を掲げるものである。

革命の任務を軸にして運動の統一を

つくりだそう！ 五・四サミット粉砕！

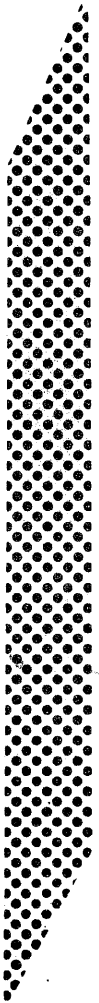
われわれ春期政治行動実天皇問題についてかかる主義を掲げる。そして今日の種々の闘争におけるし意的な位置付け論議や歪少な運動の統制と系列化されている現状を批判するものである。

われわれは、あくまで、プロレタリア革命の原点にたちもどり「労働者の経済的解放のためには何をすべきか」「ブルジョア政府を打倒し、労働者の政府を準備するためには何が必要か」「現代社会において、プロレタリアートの解決すべき任務は何か」等々を論議し、あくまでプロレタリア革命のみ忠実で謙虚な運動をつくり

出す条件を模索してきた。われわれは、このような闘いを困難ではあるが、一から作り出すことをしなければ、現在の運動の現状を革命的に転換できないだろうと考える。

かかる考えのもとに、われわれは、五・四東京サミット粉砕闘争を呼びかけ、サミット粉砕闘争をにない、それを通じて、プロレタリアートの国際共同行動の組織化を呼びかけるものである。

すべての諸君！ 五・四東京サミット粉砕闘争への結集と、プロレタリア革命の条件と任務をめぐる論議を発展させることを今こそ焦眉の課題として共ににない切ろうではないか！



共産同盟（火花）への圧倒的カンパを！

全国の共産主義者、活動家、労働者諸君！

夏期一時金の時期にあたって、共産主義者同盟（火花）より、われわれが際会している情勢と課題を説明するとともに、圧倒的カンパを訴える。

現在の情勢を特徴づけているのは、国際的規模での革命運動の新たな発展である。中南米、中東、アフリカでは革命運動は一步一步前進しているし、アジアではフィリピン二月革命につづいて、韓国で革命運動が急速に激化している。日本でも恒常的な大衆運動と同時に、ゲリラ的であれ武装闘争が定着しつつある。

四月一五日の米帝のリビア爆撃は、この革命運動を圧殺するために、反革命軍事介入の強化、拡大をめざすものである。日帝は、「国際国家」を看板に、国際反革命の一翼をになっている。ブルジョ

アジは、反革命の政治・軍事を全面に押し出すことで、経済上や外交上の対立をおおい隠し、国際的団結を誇示しようとしている。だが、まさにそのことが、全世界の革命運動の新たな発展を呼び起させずにはおかないだろう。

これら現在のすべての事情は、日本のプロレタリアートの前に、権力問題、政府問題への回答を強く要求している。また、プロレタリアートの新しい国際的団結をつくりあげてことを提起している。われわれ共産主義者同盟（火花）は、この歴史的課題に応えるために、ブントに代表される新左翼派の綱領・戦術・組織を、真に革命的なものに全面的に転換するところから出発している。それが、いかなるものかは、われわれの綱領・戦術テーゼ、各種パンフ、『火花』論文をみてもらえればわかるはずである。われわれの活動は着実に前進しているし、新しいインタービューロー建設の事業のもとへの全国の共産主義者、活動家の結集がはじまっている。いったい、現在の情勢のもとで、共産主義者同盟（火花）の提起している事業と活動以外に、どこに次の時代を準備する道があるであろうか。共産主義者同盟（火花）の事業を進展させることこそ、プロレタリア世界革命を勝利に導くための近道である。

革命の勝利に向けて、事業を進展させるためには、巨額の資金が必要である。全国の共産主義者、活動家、労働者諸君の共産主義者同盟（火花）へのカンパ協力を強く要請する。

(1) 春、四月に入ってからアパートを借りてから三週間となり、政治警察の動きが断片的ながら見えたので、一括して報告することになります。

(2) 政治警察の気配を最初に感じたのはアパートを借りて三日目のことです。管理人夫婦のうちの妻の対応・仕草が微妙に変化したこと、街頭に出ていると時々ピンと張りつめる感じをおぼえたこと、こうしたのが気配です。

(3) まず、張り込みから述べます。周囲にアパートのある一ブロックおよび近くの駅と主要道へ通じる道路に不審車を発見していません。また、アパートの出入口から出て見たせる視界内にも不審者を発見していません。公然張り込みスタイルの車を一度だけ見かけたことがありますが、車内の男二名は五十すぎで、私と視線をきっちり合せ、自信に満ちており、そして、挑戦的気配もなく、これまで遭った政治警察では一名を除いて類例のない者たちでした。病院の前ということもあり、この車を注意対象からはずして行動しました。後から尾けたり、追い越したりする

車を判断することはできていません。追い越しの車は前方で私を待つような駐車をやっている、商品を積んだ商用車、などで不審車から一応除外できます。でも、以上から、張り込みがなされていないという判断はできません。

つぎに、政治警察のゴミ拾いを述べます。これまでのゴミはすべて持ち去られています。入居中のアパートは五十以上の部屋があるためポリバケツも十個ぐらいあるのですが、他のゴミを残して私が捨てたゴミだけを拾っています。暗がり捨てたスーパの小袋三つのゴミだけ選り出しているのはさすがに感心しました。この件から、アパートからの出入りをずっと監視していること、人や車を視界外に配しているか、たぐみにカモフラージュしていること、たぶんアパートの出入りを監視できるポイントを持ったアジトを設定しているだろうこと、そして、事物の形態を詳細に監視する技術、たとえば、一定の暗視力を持った望遠鏡を利用してることが推測されます。張り込みは、見えない形でなされていることがわかったのですが、これはたまたま政治警察がミスをしていたこ

とでわかったのです。厳格な非公然さを取りつこうというのであれば、数時間とか真夜中のうちに中身を入れかえるなりしてカモフラージュするのが鉄則だからです。

(4) つぎに尾行について述べます。道路、駅等での点張りが発見していません。定点張り込みは長時間の停車や立ちんぼう、また、短い距離の往復や円環徒歩という形態から、かなり目立ちます。もちろん、私には数秒から長くても一分位しか眼に入らないのですが、周囲から浮き上がっている感じがします。

まず、電車での尾行から報告します。一名はすぐ後一といっても十秒ぐらいして一から同一ホームにきました。私が注視したところ、その男は五十メートルぐらいの地点に立っていました。電車が入るまで本を読み、アナウンスで顔を上げたところ、男は消えています。その新しい位置を確かめるには、乗降客が多すぎました。電車が入線すると七、八人の人が改札口から電車に足早に向ってきたのですが、その中に男Bがいました。男Bは隣りの車両に乗りましたが、座席にすわるときチラッと私の方を見つめています。

もうひとつの例をあげます。券売機に近づくと、男Cがやって来ました。この男Cの臭いは弱かったのですが、反対側のホームへ地下道で移動するの追ってきたので、尾けているかもしれないと思えました。男Cは私を追い越して十メートルぐらい離れた地点にいました。電車が入ると男Dが現れ、私をはさむ感で隣りの車両に乗りました。この二つの例から、政治警察は二名一組で電車内尾行

をしており、その車内位置は私をはさむ形であり、一名はバレーでも、他方はバレーないよう発車直前まで姿をかくしていること、別の側面から見れば、ドアが閉まるときに私がとびおりても他方が見失わないようなスタイルをとっていることがわかります。ここで補足をしておきます。男AとDを政治警察と判断したのは勘にもとづいています。男Bのように私を盗み見るといった初歩的ミスをのぞけば、男Cにしても、地下道を利用して隣りのホームへ行くのはよくあることです。彼らの尾行を形態・条件から判断させるものは先に述べたこと以上にはありません。これは、電車内尾行者が、私が下車してもそのまま電車に乗っていたり、降りても尾けてこないというところからいえることです。たしかに、駅の改札を出るとたいいの場合、不審者はいません。ただ一度だけ、改札を出ると、三十メートルぐらい後方の看板の裏に潜んでいるのを発見したぐらいであり、それも、チラッと顔を出してすぐ隠れるという相手のミスから判明したにすぎません。

徒歩の尾行について述べます。バスから降りたのは初老の男一人と私だけで、バスの近くで駐車する車はありませんでした。ブルジョア住宅街に入り、鋭角道路の角を利用して首を横にふると後が見えます。男Eがすぐ道の反対側、私からの死角にとびうつりしました。もうひとつの例。病院へ着いたのが早すぎたので、茶でも飲むとUターンしたところ、後方一〇〇メートルぐらいに男Fがいました。男Fはすぐ姿を消しました。その地点には保険会社があり、

度胸で出入りできます。通りすぎて五軒ほど先の茶店へ入り、出てくると、男Fが軒先に立っていて、すぐ歩き去りました。この二つの例では政治警察を一名しか発見していません。そこで第三の例。アパートを出てすぐ、男Gが足早に追いこしていききました。オドオドキョトキョトしていましたが、交差点を越えて一〇〇メートルぐらい先の民家に入ったようです。そのあたりへ行くと、植え込みの奥に立ちつくしていました。その男をほっぽって近くの茶店へ入り、出ると、五十メートルぐらい先の角で人影がゆれました。男Hか女Aかは不明ですが、シヨルダーバッグを持っています。その角に近づくと一般通行人だけだったので、近くの商店にでも入ったのかもしれない。第三の例でわかることですが、政治警察は単独での尾行を変則！他方がまかれたりしたときのものとしていて、一方が先を行き、他方ができるだけ非公然に尾ける形をとっているようです。また、背広、ジャンパーを着たり、脱いだりして、近づかないかぎり判別できない変装を簡単にやっています。私への尾行ではつぎからつぎへと人がかわるのもありましたが、最後には人がいなくなり、車も近づけなかったこともあったのでしようが、政治警察が一人で意地になって尾けてきたこともあり、この例は見破られたと思つたら交替する形で、わかつているのは五人だけだったので、グリーン尾行をやっていたのではないかと思ひます。

(5) アパート内住民および近隣住民については特別な把握をやっていません。政治警察のアジトがアパート内にある可能性もありません。政治警察がアジトをアパート内に入るとは思ひません。また、一定の距離をおいた尾行がたびたびマカれることを許しておくはずもありません。さらに、私が大衆的組織で活動していないことから、スパイ形成で私の活動を捕獲することができないからでもあります。いまは、過渡的段階であります。当面は密着尾行と闘争し、文書一会議を防衛することが課題となるでしょう。

(7) 以上の報告を、新しくこの運動に参加する仲間たちに、この運動に参加していく技術を教育・訓練するさいの、一参考にしてもらえば幸いです。

○月○日

(酒匂 薫花)

政治警察の一尾行形態の報告

前回の報告以降の経験・観察を通して、政治警察の尾行形態がいくぶんながら判明したので報告します。

(1) 住居周辺への車配置と車尾行のスタイル
前回の報告では住居周辺での不審車を発見していないとしていましたが、住居から二〇メートル程はなれた地点に政治警察車を配置しているのを確認できました。その地点は、住居から数ブロック

ですが、この安いアパートで既住者の中にはいないだろうし、新しく入った者は他にいないようです。アパートの出入りを監視できる家は多く、その発見はなりゆきまかせにしております。

さて、今回の報告をなした私のクセを参考までに述べておきます。公然活動家への尾行、張り込みが広範になされ、本人が気づかないまま活動を政治警察ににぎられているというケースが多々あります。七十年以降の(地下組織・軍事組織)の現実に照応した非公然反革命の増大からしても、私への尾行・張り込みは日帝の本姓からしてあたりまえだと思つています。そういうわけで、単独で行動しているときにはほとんど、後をふりむいたり、走ったりしてのチェックはやっていません。シヨウウインドウなどの利用や鋭角の曲り角を利用するぐらいです。できるだけ平常心にし、付近の人間や車から浮き上がってくる感じを重視しています。チェック一般はこちらが疲れるだけです。政治警察を牽制し、彼らを疲れさせるために、余裕をもってチェックを見せるぐらいにしています。チェックはマキと同時に一本化してはじめて本来の効用を発揮すると思つています。マキは中途班端が一番悪い！秘密活動のアリバイ証明という墮落に陥りやすいので、集中・充実してやるように留意しています。以上述べたことは私のクセという色あいが強いので批判的に検討して下さい。

(6) いずれ、政治警察が密着尾行に出てくる可能性があります。新顔を投入できなくなり、リサイクル要員となれば、どんなに技術

をへだて、かつ、踏切を越えたところであり、住居から最寄りの駅やバス停、また、主要道にむかう道すじとは異なる場所でした。この確認で、住居から一ブロック周辺の地帯や、最寄りの公共交通機関への道すじをチェックするだけではダメなことがわかりました。

つぎに、政治警察車と判断した経過を報告します。住居から隣駅へ行くのに初めての道路を通りました。その通りは、車の通行がほとんどなく、団地に面しているためもあり、じゅずつなぎに駐車してありました。車の中には誰も乗っていませんでしたが、一台だけ変わったナンバーの車があり、それに注目したところ、団地の方から男一名がやってきて、その車に乗りました。その男の雰囲気は臭かったのでチェックをやることにしました。車を通りすぎて二〇〇メートルぐらい先に信号がありました。その交差点を左へ曲る形をとってすこし歩きつづけたところ、その車は左折して私を追いこしていききました。私はUターンをして、交差点をわたり、すこし前方に行つてからUターンをして、その車の行った方向を見ると一〇〇メートルぐらい先に駐車してました。その地点には特別なものがあるわけはありません。この車が尾行車であるのはまずまちがいないと考えられます。この例から、人が乗っているかどうかは公然事務所や住居、またひんぱんに利用する場所などでの張り込みや尾行に用いる政治警察車の判断基準になりえないことがわかります。また、後からノロノロ尾いてきたり、追いこして待たたりするスタイルではなく、きわめて自然な走行をとっていることから、こうい

う尾行車の発見はきわめて困難です。

(2) 尾行のスタイル

前回に政治警察の巧妙な尾行を報告しましたが、今日までなお、継続して同一人物が尾行してくるスタイル、また、真後ろから尾けてくるスタイルには遭っていません。後を見るだけではチェックできないことがわかります。では、政治警察はどうやって尾行をしているのかです。私に見えないように、ものかげにかくれながら尾行することはとても難しいし、地勢的に不可能な場合が多々あります。この疑問―困難を解決する一つのスタイルを発見したので報告します。私が歩いていた通りをおとって尾行しているのがそのスタイルでした。発見、というよりも、となりの通りにはいつて見た人たちの中で政治警察と特定できたのは、尾行者の未熟によつて見えます。イヤホーンをつけっぱなしにして小走りにきていた男が、私の姿を見るや、Uターンしてしまふ例もありました。また、私を見るや、歩を止め、背を向けて立ちつくすのもありました。もし、これらの政治警察が何気ない雰囲気で行くや小走りをつづけ、イヤホーンをとりはずしていたら、尾行者という判断はできなかったでしょう。実際、多くの場合、尾行者を発見しえないと考えます。

以上の判明した事実から一定のチェックをやっているながら尾行を発見できず、日常の行動が政治警察に把握されているという幾多の報告と事例が理解できます。敵はますます、集団で、組織的で、集

中ので、巧妙な尾行をやっているのです。私たちは、さらに厳格なマキリチェックの活動技術を高めて、政治警察が私たちの会議へ接近することを許さず、より多数のプロレタリア大衆を組織していかなくてはなりません。そして、今日の政治警察との闘争における具体的形態と関係が、一方では、政治警察と闘う能力をもつ革命家の重要性をますます高め、他方では、武装―軍事という今日の日常における非合法活動能力が、地下活動家―地下組織の建設いかにますますかかっていることを承認しなくてはなりません。合法―公然の舞台をがっちり守りぬぎ、非合法―非公然と実際に結合するた

め、以上の報告と意見を参考にしてください。

×月×日

(酒匂 薫花)

共産主義者同盟（火花）発行パンフ紹介

★ われわれの綱領と戦術テーゼ

★ われわれの綱領について

- ▽第一分冊 綱領原則部分前半の解説 (八〇〇円)
- ▽第二分冊 綱領原則部分後半の解説 (三〇〇円)
- ▽第三分冊 ソ連の評価についで (三〇〇円)
- ▽第四分冊 帝国主義批判と民主主義問題 (三〇〇円)
- ▽第五分冊 プロ独編集委の綱領批判 (三〇〇円)

★ 新たなインターナショナル・ビューロー

をめざして三〇〇円

- ▽新たなインターナショナル創建・単一非合法党建設の事業をともにおしすめよう!
- ▽どのような「道」をすすんでほならないか、そしてわれわれの「道」とはなにか?
- ▽連合赤軍判決と連合赤軍問題の総括について
- ▽代表者会議の意義からみたわれわれの歴史

★ 朝鮮プロレタリアート・人民との

連帯をめざして!

二〇〇円

- ▽真に革命的な朝鮮プロレタリアート・人民との連帯とは?
- ▽「日朝連帯」とプロレタリアートの任務
- ▽在日朝鮮人問題にたいし、プロレタリアートはどのような態度をとるべきか
- ▽入管体制再編粉碎! 二つの朝鮮政策反対! 米日「韓」反革命軍事体制打倒の先頭にたちプロレタリアートの戦闘的団結を勝ちとろう!

★ ロシア革命の教訓 六〇〇円

- ▽労働独裁と永続革命
- ▽ロシア革命とボリシェビキ

★ レーニン組織観復権のために五〇〇円

★ 中米革命の一教訓 二〇〇円

★ 反核とソ共・日共 二〇〇円

★ 日本共産党批判 二〇〇円

▽米ソ「共同声明」と日ソ共産党「共同声明」はなにを
しめしているのか
▽日本共産党のマヌーバ―政治の内紛

★ 革共同イズム批判 二〇〇円

★ 反核運動に対する我々の態度 二〇〇円

▽「反スタ・トロツキズム」の誤り
▽社・共への追従と「無党派」への迎合
▽「先制的内戦戦略」批判

▽原水禁運動の破産と今日の「反核」運動
▽「反核」のスローガンについて
▽反核運動におけるきまり文句

★ 三里塚闘争の「分裂」に対する我々の態度 一五〇円

★ 労働組合の獲得に向けて 一五〇円

▽プロレタリアートは三里塚の「分裂」にたいし、
どのような態度をとるべきか？
▽三里塚闘争討議資料―今回の「分裂」問題にたいする
われわれの態度の確定にむけて―

▽社会排外主義と労働運動
▽求められているのは共産主義革命・革命党と
結びついた労働運動ではないのか

★ 三里塚闘争に関して 一五〇円

★ 春闘に対する我々の態度 一五〇円

▽運動報告―「分裂」集会はなにを示しているのか
▽報告―九・一五と十・九について
▽三里塚闘争の現局面とわれわれの課題

▽労働運動のブルジョア的歪曲と闘争し、労働者階級の
実力闘争を組織しよう―八四年春闘とプロレタリア―
トの任務―
▽プロレタリアートはなぜ、準備会春闘―統一労働組
春闘に反対しなければならないのか？

★ 労働情報グループ批判 一五〇円

近日発行予定パンフ

▽「労働情報」グループは、労働者をどこへつれて
いこうとしているのか
▽岐路にたつ「労働情報」グループ

★ 教組運動によせて 二〇〇円

★ 革命的で大衆的な運動の組織化に向けて

▽教育臨調に対しプロレタリアートはどういう態度
をとるべきか
▽またしても労働官僚どもの裏切り
▽官僚主義対ブルジョア自由主義

▽革命的スローガンについて
▽中曽根打倒のスローガンと帝国主義的再編との
闘争について

★ 革命的な学生運動の創建に向けて 一五〇円

★ 南部アフリカ階級闘争の教えるもの

▽「学生運動と労働運動の結合」をめぐって
▽「階級的労働運動との結合」のスローガンについて
―学生運動の革命的再建のために―

★ 権力分析 二〇〇円

▽自衛隊の機構
▽日帝警察権力の特殊部隊の実態
▽肥大化する警察の情報・通信機器
▽電話盗聴の実態について

火花 第五八号

発行日 一九八六年六月一日

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定価 三〇〇円